

忘れられた南の島

— 小笠原墓参同行記 —

戦後二十二年ぶりの墓参りに小笠原諸島へ海上保安庁の巡視船「宗谷」がむかいました。

二十二年もの間あれほうだいになっている墓地を切り開き、先祖の墓石を水で清める墓参団は、長年の念願がかない感じが無いようです。

東京から千二百キロの南の孤島父島の島民は四十世帯二百人あまりで、南国の陽光のもとで明るくくつたくがありません。

しかし、最近の島の生活はベトナム戦争によりグァム島からの日用雑貨の船便がとどこうり、また若者たちも就職難、結婚難などいろいろ問題も多く、ようやく日本復帰への動きがみられるようになった小笠原の表情です。

日本防疫作戦

— 東京・横浜 —

昨年、関東全域に異常発生した緑の大敵アメリカシロヒトリ。今年もその季節がやって来た。

アメリカシロヒトリという虫は終戦の混乱期に米軍物資に付着して堂々渡来、サナギで越冬したアメリカシロヒトリは六月と八月の二度にわたって毛虫となり桐・梅・桑など100種にも及ぶ樹木を喰い荒らす害虫である。

こうした国外からの招かざる客の侵入を防ぐのが農林省、厚生省の防疫官である。

羽田空港、横浜港を始め、絶えず検疫の眼を光らせている。伝染病発生地域の外国人お客さんにも厳しい検疫が行なわれ、ここ横浜港の植物検疫官は南洋産果樹に付いてくるミカンコミバエ、また穀類などに付着する害虫を燻蒸する為に防毒マスクをつけて、命がけの青酸ガス作戦を展開、また動物検疫官も、牛・馬などの蹄病の侵入を防ぐべく総力をあげて防疫作戦をくりひろげている。

アメリカシロヒトリなどの如く、すでに上陸したものには何はともあれ、国民一丸となってその撲滅が行なわれなければならない。